

小寺 隆韶（こでら・りゅうしょう）

1、プロフィール

劇作家。演出家「どらまぐるーぷ川」主宰。高校演劇顧問としてその発展に貢献。八戸市民創作オペラ、青森市民野外劇、あすなろ国体開会式などの演出。県芸術文化賞受賞ほか。

<生没>

1931(昭和6)年7月7日～2013(平成25)年9月30日

<代表作>

戯曲集『かげの砦』『石の海』『俗物礼賛』

小説『風と土と』『里よ女外伝』『柿の里通信・演劇とわたし』

<青森との関わり>

青森高校、弘前大学時代から演劇を始め高校教師になる。演劇部顧問として県文連演劇部の指導的役割を果たす。

2、作家解説

劇作家、演出家。

昭和6年7月7日東郡新城村大字福田(現青森市)に父、小寺久、母ふしいの二男として生まれた。小寺はかつて弘前の五十石町に居住し、代々津軽藩に仕えた武士の家柄。父久は隆韶が生後7ヶ月目に病没。その後母は助産婦として家計を助けた。

文学への芽生えは小学6年頃母が与えた世界文学全集38巻である。特にチエホフ、ゴーリキーなどロシア文学に興味を持つ。

青森中学、青森高校、弘前大学時代から演劇をはじめた。

当時フランス語担当で演劇部顧問であった津倉淳との出会いはこの世界への没入を決定的なものにした。周辺には大島孜、川村勝、目時義隆らがいた。津倉淳訳ベルコール作『海の沈黙』などが上演された。

昭和 29 年八戸商業高校に赴任、神亮一と出会う。八戸演劇研究会とのつながりから舞踊家豊島和子を知る。

昭和 33 年 1 月県高等学校演劇連盟が結成され第 1 回の発表会が県立図書館ホールで行なわれ、八商高「牛方ばなし」(神亮一作)で参加する。

昭和 38 年学生ラジオコンクールでドラマ「机の中」が全国 2 位となる。昭和 39 年八戸北高校に転任。昭和 47 年「かげの砦」が全国高文祭演劇部門で最優秀賞を受賞国立劇場で披露される。のち、すべて顧問の作品で参加、「てのひらの雪ひとつぶの消えるまで」「優勝旗」「おらたちの川」「演劇とはなにか…」が全国大会へと進む。昭和 51 年職業劇団青年劇場が「かげの砦」を東京公演、好評のうちに全国巡演 934 回を数える。

昭和 52 年「あすなる国体」開会式の構成演出、両陛下天覧の集団演技が幼児と 1600 名の一般婦人によって演ぜられた。

昭和 63 年からは「石の海」「水は眠らない」など八戸創作オペラ協会による演出、脚本の仕事が続いた。

平成 10 年 8 月青森市政 100 周年記念市民野外劇の演出を担当。文化集団「縄文社」「どらまぐる一ぶ川」主宰。第 1 回青森県芸術文化賞。斎田喬戯曲賞。第 42 回県文化賞。小説「風と土と」「津軽から来た奴」戯曲「かげの砦」「石の海」「俗物礼賛」ほか。

八戸短期大学教授を務めた。